● 丹後あじわいの郷

課題・問題点等	（設置目的） ・豊かな自然に恵まれた丹後半島を背景に、見て、ふれて、あじわって、体験する本格的な体験型農業公園として設置したが、地域住民の交流拠点としての意義は一定認められるものの、都市との交流増進施設としての意義が十分に果たされていない。 （経営状況） ・入園料収入の減やホテル等収益部門の売上収入の減等により、運営を委託している民間会社の収支状況も合わせると、近年赤字傾向にある。 ＜入園者数、入園料収入の状況＞ ・入園者数はここ3年間は10万人以上に回復しているものの、開園当初の3分の1程度の水準にとどまっている。 （⑩開園時353,730人、▯109,121人） ・月例祭（毎月第３日曜日開催、軽トラ市等）などの取組により、近年、無料入園者は増加しているものの、有料入園者の割合は全体の4割程度であり、入園者数は回復傾向にも関わらず入園料収入は減少傾向にある。 （⑳21,880 ▯21,155 ▯16,067 ▯16,101 ▯13,912（千円）） ＜収益部門の状況＞ ・宿泊施設（ゆーらぴあホテル）の定員稼働率が極めて低い（▯14％）ことや、加工部門や物販・外販部門等の売上収入の減等により、全体のコストを賄うだけの収益をあげていない。 （問題点） ・園内施設、販売品、飲食品等が他の類似施設と変わらないものが多く、売店で丹後あじわいの郷と表示したものが少ないなど、都市部（京阪神）からの利用者客を呼び込む魅力が乏しい。 ・ホテルに宿泊をする動機付けが不十分。 ・丹後あじわいの郷在り方検討会（平成20年9月）での提言（園内への供給機能だけでなく地域特産物の加工・販売拠点の展開、体験型観光の推進等）や、「道の駅」（平成15年8月）への指定がなされているが、十分生かされていない。 ・一部施設において老朽化が進んでいる。 ・京都縦貫自動車道の開通や「海の京都」構想の推進に即した事業展開が今後必要。

府民サービス等改革検討委員会による改善意見等	（改善方策） ・丹後地域における交流拠点としての意義は一定認められる。 ・例えば、ＫＴＲや但馬コウノトリ空港などを活用した但馬・豊岡との府県域をまたいだ観光モデルの検討、情報交流センターやホテル等の大学ゼミ研修での活用検討、ボーイスカウトの利用促進など入園者数を増やし、それを確実な収益増につなげていく工夫やリピーターの開拓が必要。 ・ゆーらぴあホテルでは、丹後地域の魅力ある食材を使い、割安感のあるメニューの提供や親子で泊まりがけで利用してもらえるような新たなプランの提案など、宿泊する動機付けを明確にし、稼働率の向上を図ることが必要。 ・コンセプトから具体的商品まで一貫性のある丹後あじわいの郷ならではの商品づくりが必要。 ・施設のリニューアルが必要。 ・「農業公園」のコンセプト、位置付け自体の見直し検討も必要。

京都府の検証結果及び対応方向	見 直 し （見直しのポイント） ・平成１９年度に入園者が8万人台まで減少、その後地元市町や丹後地域の農業商工観光関係の団体個人で結成された丹後あじわいの郷協力会との連携により、月例祭の開催など賑わいを取り戻し最近では１１万人程度に回復してきた。 ・また、「丹後食の王国」の拠点施設としての位置づけ、さらに今年度からは丹後の若手農業経営者を育成する「丹後農業実践型学舎」として活用を図っている。 ・今後は、今回の検討委員会の意見を踏まえ、「丹後の食の拠点」・「農業漁業等の人材育成の拠点」・「幅広い交流の拠点」としての役割を担う施設として深く検討していく。